

調査団報告書

今度こそノーベル文学賞編

調査内容

村上春樹の作品で名古屋が出てくる作品にはどんなものがあるの？

調査手順

『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』（文藝春秋 2013年）が出版された時、名古屋が舞台だと話題になった。本を読みながら、作品に登場する場所を想像するのが楽しかったな。何かヒントがないかと思って、『村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』をどう読むか』を調べると、『地球のはぐれ方 東京するめクラブ』（村上春樹・吉本由美・都築響一／著 文藝春秋 2004年）に名古屋のルポが収録されていることがわかった。

『村上春樹作品研究事典』を調べてみよう。各作品ごとに舞台や登場人物、あらすじなどが載っている。ほかの作品で、舞台が名古屋と書いてあるものは見つからなかった。

ある調査団員の情報によると、『海辺のカフカ』（新潮社 2002年）が関係あるのでは？とのこと。『村上春樹全小説ガイドブック』を調べると、登場人物紹介に「中日ドラゴンズ」の文字が！読んでみると、中日ドラゴンズファンの青年が登場するが、名古屋が舞台ではない。『村上春樹全小説ガイドブック』に掲載されていない『女のいない男たち』（文藝春秋 2014年）も確認したが、名古屋は登場しない。

インターネットで「村上春樹」と「名古屋」をキーワードにして検索すると、エッセイ『村上ラヂオ』（マガジンハウス 2001年）が見つかった。ほんの少しだけ名古屋について書かれている。

調査結果

名古屋を舞台にした小説には、『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』、ルポには、『地球のはぐれ方 東京するめクラブ』がある。名古屋がよく観察されていて、両方読むとより楽しめそう。『海辺のカフカ』は、名古屋が舞台ではないものの、中日ドラゴンズファンの青年が登場する。『村上ラヂオ』によれば、名古屋駅に到着すると、ある歌を口ずさんでしまうそう。なぜなのかは、読んでのお楽しみ。

今回の調査で使った資料

『村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』をどう読むか』

（河出書房新社編集部／編 河出書房新社 2013年）

『村上春樹作品研究事典 増補版』（村上春樹研究会／編 鼎書房 2007年）

『村上春樹全小説ガイドブック 増補改訂版』（洋泉社編集部／編 洋泉社 2013年）

作成：名古屋市図書館 名古屋なんでも調査団

